

2018年度しあわせ研究

急性冠症候群患者における
精神的苦痛と関連要因について

研究員 野口 普子、成澤 知美、
浜崎 景、松岡 豊



幸福感をはじめとしたポジティブな感情は、健康であることや well-being などと関連していることが知られている。一方で、身体疾患の罹患は、程度の違いはあるものの精神的苦痛を感じる。我々は、身体疾患に伴う精神的苦痛やその関連要因を明らかにし、対処方法を示すことで、心身の健康を高めることにつながり、幸福感などのポジティブな感情を抱きやすくなると考えている。

本研究は昨年につき、心筋梗塞を含む急性冠症候群（ACS）患者の精神的苦痛とその関連要因について検討を行ったもので、2報目になる。

ACS 後はうつ病発症のリスクが高く、加えて、うつ病は心疾患後の予後不良の危険因子と言われている。絶望感や抑うつを構成する重要な症状である。これまで、絶望感と抑うつ症状の関連は認められているが、長期的な影響についての検討はなされていない。したがって、本研究では絶望感と急性冠症候群（ACS）後 6 か月時点の抑うつ症状の関連を検討した。

方法は、以下の通りである。国立病院機構災害医療センターに入院し、緊急経皮的冠動脈インターベンションを受けた 20 歳以上の ACS 患者を対象とした。絶望感や抑うつはベースライン時にベック絶望感尺度（BHS）で測定し、9 点以上を中程度以上の絶望感を感じていると評価した。抑うつ症状は Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS) でベースライン時と 6 か月時点に評価した。HADS は下位項目として抑うつと不安を測定することができる。本研究では抑うつ症状に焦点をあて、抑うつ症状に関する項目（HADS-D）の得点を用いた。本研究は災害医療センター倫理委員会の承認を受けて実施された。

結果は、適格基準を満たした患者 176 名のうち 101 名から参加の同意が得られ、6 か月後の追跡調査を 99 名が完遂した。参加者の平均年齢は 63.1 ± 11.2 歳、男性が 87 名であった。BHS 得点は 8.07 ± 4.53 であり、47.6% が 9 点以上を示した。BHS 得点は、6 か月時点での抑うつ症状を予測した。本研究により ACS 患者の半数近くが中程度以上の絶望感を感じていることが示された。また、ACS 後は発症早期から抑うつ症状の観察および絶望感についての介入が抑うつ症状の軽減に有効かもしれない。